初 版 1996.07.13
第2版 2021.06.05

博物館 Dictionary No.32

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

装飾付須恵器
（須恵器　台付装飾壺）

古墳時代の土器には、茶褐色をした土師器と灰色をした須恵器の二種類があります。写真にあげた変わった形の土器（図1）は須恵器の方です。須恵器は古墳時代から奈良時代にかけてさかんに作られました。須恵器は丘陵の斜面をくりぬいて作った「あな窯」のなかで高温で焼かれた硬い土器です。その技術は5世紀ごろに朝鮮半島から伝わってきました。

その須恵器のなかでいちばん面白いのは兵庫県たつの市の西宮山古墳という6世紀のお墓からみつかったこの脚付きの壺です。今回はそれをじっくりと見てみることにしましょう。

この壺の面白さはその表面にくっついた人物や動物の小さな像にあります。まず図2を見てください。これは4人の人物なのですが、右側のふたりはとっくみあっているようにみえます。これは相撲をとっている場面ではないかといわれるもので、左側のふたりは行司さんかあるいは見物人だとおもわれます。「いや相撲ではなくて男女が抱き合っている場面だ」というひともいます。しかし見物人がいるというのはすこし変ですね。

『日本書紀』という奈良時代の古い歴史書には「當摩蹶速」と「野見宿禰」という力士が日本で最初に相撲をとったという神話がのっています。その勝者となった野見宿禰が亡くなった場所が、

図1　西宮山古墳出土の装飾付須恵器
（須恵器　台付装飾壺）　京都国立博物館蔵

図2　相撲をとる（?）人物

この須恵器の出土した兵庫県たつの市付近であったといいますから、なにか深い関係があるのかもしれません。（ただし、當摩さんと野見さんの相撲はこのようなとっくみあいではなくて、足をつかっての蹴りあいだったと記されていますが…。）

図３は一頭の鹿を二匹の犬とひとりの人間が追っている狩猟の情景をあらわしているとされます。首のながい鹿に耳をぴんと立てた犬たちが吠えかかっているという瞬間をうまくとらえているといえるでしょう。猟犬をつかった狩りのようすは弥生時代の銅鐸絵画にも見られます。

図3　鹿狩りの場面（?）

このシーンにもまったく違う解釈があります。母犬のまわりを子犬がじゃれているという平和な光景だというものです。けれどもこの群像には緊迫感があるので、やはり狩猟説のほうがぴったりくると思うのですが、いかがですか？

図４　荷物をかつぐ人物

図４は背中に荷物をかつぐ人間ひとり（左）と棒で荷物をはこぶ人間ふたり（右）をあらわしています。荷物が何かはわかりにくいのですが、たとえば古墳を築くための土をはこんでいるというような土木作業の場面なのでしょうか。あるいはとなりの情景（図３）からみて狩りの獲物をかついで帰るようすなのでしょうか。

図にはあげませんでしたが、もう一箇所にも小さな像の付いていたあとがあります。犬が一匹残っていますので、こちらも狩猟の場面だったようです。

この壺が出土した西宮山古墳は長さ35ｍの前方後円墳でした。後円部の横穴式石室からはこのほかにも須恵器の壺や椀、高杯などがたくさんみつかりました。また馬具や鉄剣・矢じり、アクセサリーとしてのガラス玉、金製の耳飾りなども出土しています。6世紀中ごろにたつの市付近をおさめていた豪族のお墓であったとみられます。

このような小像をつけた壺は岡山県・兵庫県を中心に西日本で多くみつかっています。その題材には相撲や狩猟のほか、鵜飼や乗馬・舞踊などがあります。それらは古墳時代の生活のようすを私たちに伝えてくれる貴重な情報源なのです。

みなさんも一度この壺の前で立ち止まって、いったいなにをしている場面なのかを推理してみて下さい。

（考古室　宮川禎一）

印刷・富士印刷社